

# 源氏物語

帚木

紫式部

青空文庫



中川の臯月さつきの水に人似たりかたればむ

せびよればわななく  
(晶子)

光源氏ひかるげんじ、すばらしい名で、青春を盛り上げてできたような人が思われる。自然奔放な好色生活が想像される。しかし実際はそれよりずっと質素じみな心持ちの青年であつた。その上恋愛という一つのことで後世へ自分が誤つて伝えられるようになってはと、異性との交渉をずいぶん内輪うちわにしていたのであるが、ここに書く話のような事が伝わっているのは世間がおしやべりであるからなのだ。自重してまじめなふうの源氏は恋愛風流などには遠かつた。

好色小説の中の交野かたのの少将などには笑われていたであろうと思われる。

中将時代にはおもに宮中の宿直所とのいどころに暮らして、時たまにしか舅しゅうとの左大臣家へ行かないので、別に恋人を持つているかのような疑いを受けていたが、この人は世間にざらにあるような好色男の生活はきらいであつた。まれには風変わりな恋をして、たやすい相手でない人に心を打ち込んだりする欠点はあつた。

梅雨つゆのころ、帝みかどの御謹慎日みかどが幾日かあつて、近臣は家へも帰らずに皆宿直とのいする、こんな日が続いて、例のとおりに源氏の御所住まいが長くなつた。大臣家ではこうして途絶えぜいたくの多い媚君を恨めしくは思つていたが、やはり衣服その他贅ぜいたく沢たくを尽くした新調品

を御所の桐壺きりつぼへ運ぶのに倦むうことを知らなんだ。左大臣の子息たちは宮中の御用をするよりも、源氏の宿直所への勤めのほうが大事なふうだった。そのうちでも宮様腹の中将は最も源氏と親しくなっていて、遊戯をするにも何をすることも他の者の及ばない親交ぶりを見せた。大事がる舅の右大臣家へ行くことはこの人もきらいで、恋の遊びのほうが好きだった。結婚した男はだれも妻の家で生活するが、この人はまだ親の家のほうにりっぱに飾った居間や書斎を持っていて、源氏が行く時には必ずついて行って、夜も、昼も、学問をするのも、遊ぶのもいっしょにしていた。謙遜もせず、敬意を表することも忘れるほどびったりと仲よしになつていた。

五月雨さみだれがその日も朝から降っていた夕方、殿上役人の詰め所も

あまり人影がなく、源氏の桐壺も平生より静かな気のする時に、  
灯ひを近くともしていろいろな書物を見てみると、その本を取り出した置き棚だなにあつた、それぞれ違った色の紙に書かれた手紙の殻からの内容を頭とうのちゆうじょう中將ちゆうじょうは見たがつた。

「無難なのを少しは見せてもいい。見苦しいのがありますから」  
と源氏は言っていた。

「見苦しくないかと気になさるのを見せていただきたいのですよ。平凡な女の手紙なら、私には私相当に書いてよこされるのがありますからいいんです。特色のある手紙ですね、怨みを言っているとか、ある夕方に来てほしそうに書いて来る手紙、そんなのを拝

見できたらおもしろいだろうと思うのです」

と恨まれて、初めからほんとうに秘密な大事の手紙などは、だれが盗んで行くか知れない棚などに置くわけもない、これはそれほど物のでないのであるから、源氏は見てもよいと許した。中将は少しずつ読んで見て言う。

「いろんながありますね」

自身の想像だけで、だれとか彼とか筆者を当てようとするのであつた。上手じょうずに言い当てるのもある、全然見当違いのことを、それであろうと深く追究したりするのもある。そんな時に源氏はおかしく思いながらあまり相手にならぬようにして、そして上手に皆を中将から取り返してしまった。

「あなたこそ女の手紙はたくさん持つているでしょう。少し見せてほしいものだ。そのあとなら棚のを全部見せてもいい」

「あなたの御覧になる価値のある物はないでしょうよ」

こんな事から頭中将は女についての感想を言い出した。

「これならば完全だ、欠点がないという女は少ないものであると私は今やつと気がつきました。ただ上<sup>うわ</sup>つつらな感情で達者な手紙を書いたり、こちらの言うことに理解を持つているような利巧<sup>りこう</sup>らしい人はずいぶんあるでしょうが、しかもそこを長所として取るうとすれば、きつと合格点にはいるという者はなかなかありません。自分が少し知つていることで得意になつて、ほかの人を軽<sup>けいべ</sup>蔑<sup>つ</sup>することのできる厭味<sup>いやみ</sup>な女が多いんですよ。親がついていて、



大事にして、深窓に育っているうちは、その人の片端だけを知って男は自分の想像で十分補って恋をすることになるというようなこともあるのですね。顔がきれいで、娘らしくおおようで、そしてほかに用がないのですから、そんな娘には一つくらいの芸の上達が望めないこともありませぬからね。それができると、仲に立つた人間がいいことだけを話して、欠点は隠して言わないものですから、そんな時にそれはうそだなどと、こちらも空で断定することは不可能でしょう、真実だろうと思つて結婚したあとで、だんだんあらがでてこないわけはありません」

中将がこう言つて歎息たんそくした時に、そんなありきたりの結婚失敗者ではない源氏も、何か心にうなずかれることがあるか微笑を

していた。

「あなたが今言った、一つくらいの芸ができるというほどのとりえね、それもできない人があるだろうか」

「そんな所へは初めからだれもだまされて行きませんよ、何もとりえないのと、すべて完全であるのとは同じほどに少ないものでしょう。上流に生まれた人は大事にされて、欠点も目だたないで済みますから、その階級は別ですよ。中の階級の女によつてはじめてわれわれはあざやかな、個性を見せてもらうことができるのだと思います。またそれから一段下の階級にはどんな女がいるのだから、まあ私にはあまり興味が持てない」

こう言つて、通つうを振りまく中将に、源氏はもう少しその観察を

語らせたく思った。

「その階級の別はどんなふうにつけるのですか。上、中、下を何で決めるのですか。よい家柄でもその娘の父は不遇で、みじめな役人で貧しいのと、並み並みの身分から高官に成り上がっていて、それが得意で贅ぜいたく沢たくな生活をして、初めからの貴族に負けないふうでいる家の娘と、そんなのはどちらへ属させたらいいのだろう」

こんな質問をしている所へ、左馬頭さまのかみと藤式部とうしきぶ丞のじょうとが、源氏の謹慎日を共にしようとして出て来た。風流男という名が通っているような人であったから、中將は喜んで左馬頭を問題の中へ引き入れた。不謹慎な言葉もそれから多く出た。

「いくら出世しても、もとの家柄が家柄だから世間の思わくだつ

てやはり違ふ。またもとはいいい家うちでも逆境に落ちて、何の昔の面影もないことになつてみれば、貴族的な品のいいやり方で押し通せるものではなし、見苦しいことも人から見られるわけだから、それはどちらも中の品ですよ。受領ずりようといつて地方の政治にばかり関係している連中の中にもまたいろいろ階級がありましたね、いわゆる中の品として恥ずかしくないのがありますよ。また高官の部類へやつとはいれたくらいの家よりも、参議にならない四位の役人で、世間からも認められていて、もとの家柄もよく、富んでのんきな生活のできている所などはかえつて朗らかなものですよ。不足のない暮らしができるのですから、儉約もせず、そんな空気の家に育つた娘に軽蔑けいべつのできないものがたくさんあるでし

よう。宮仕えをして思いがけない幸福のもとを作ったりする例も多いのですよ」

左馬頭がこう言う。

「それではまあ何でも金持ちでなければならぬんだね」

と源氏は笑っていた。

「あなたらしくないことをおっしゃるものじゃありませんよ」

中将はたしなめるように言った。左馬頭はなお話し続けた。

「家柄も現在の境遇も一致している高貴な家のお嬢さんが凡庸であつた場合、どうしてこんな人ができたのかと情けないことだらうと思います。そうじゃなくて地位に相応なすぐれたお嬢さんであつたら、それはたいして驚きませんね。当然ですもの。私らに

はよくわからない社会のことですから上の品は省くことにしましょう。こんなこともあります。世間からはそんな家のあることなども無視されているような寂しい家に、思いがけない娘が育てられていたとしたら、発見者は非常にうれしいでしょう。意外であったということは十分に男の心を引く力になります。父親がもういいかげん年寄りで、醜く肥ふとった男で、風采ふうさいのよくない兄を見ても、娘は知れたものだど軽蔑している家庭に、思い上がった娘がいて、歌も上手であったりなどしたら、それは本格的なものではないにしても、ずいぶん興味が持てるでしょう。完全な女の選にははいりにくいでしょうがね」

と言いながら、同意を促すように式部丞のほうを見ると、自身

の妹たちが若い男の中で相当な評判になつてゐることを思つて、それを暗に言つてゐるのだと取つて、式部丞は何も言わなかつた。そんなに男の心を引く女がいるであらうか、上の品にはいるものらしい女の中にだつて、そんな女はなかなか少ないものだと思つてはわかつてゐるがと源氏は思つてゐるらしい。柔らかい白い着物を重ねた上に、袴はかまは着けずに直衣のうしだけをおおように掛けて、からだを横にしている源氏は平生よりもまた美しく、女性であつたらどんなにきれいな人だろうと思われた。この人の相手には上の品の中から選んでも飽き足りないことであらうと見えた。

「ただ世間の人として見れば無難でも、實際自分の妻にしようとする、合格するものは見つからないものですよ。男だつて官吏

になつて、お役所のお勤めというところまでは、だれもできませんが、實際適所へ適材が行くということはむずかしいものですからね。しかしどんなに聡そうめい明な人でも一人や二人で政治はできないのですから、上官は下僚に助けられ、下僚は上に従つて、多数の力で役所の仕事は済みますが、一家の主婦にする人を選ぶのには、ぜひ備えさせねばならぬ資格がいろいろと幾つも必要なのです。これがよくてもそれには適しない。少しは譲歩してもまだなかなか思ふような人はない。世間の多数の男も、いろいろな女の間係を作るのが趣味ではなくても、生しょうがい涯の妻を捜す心で、できるなら一所懸命になつて自分で妻の教育のやり直しをしたりなどする必要のない女はないかとだれも思うのでしよう。必ずしも理想



に近い女ではなくても、結ばれた縁に引かれて、それと一生を共にする、そんなのはまじめな男に見え、また捨てられない女も世間体がよいことになります。しかし世間を見ると、そう都合よくはいっていませんよ。お二方のような貴公子にはまして対象になる女があるものですか。私などの気楽な階級の者の中にでも、これと打ち込んでいいのはありませんからね。見苦しくもない娘で、それ相応な自重心を持っていて、手紙を書く時には蘆手あしでのような簡単な文章を上手に書き、墨色のほのかな文字で相手を引きつけて置いて、もつと確かな手紙を書かせたいと男をあせらせて、声が聞かれる程度に接近して行って話そうとしても、息よりも低い声で少ししかものを言わないというようなのが、男の正しい判断

を誤らせるのですよ。なよなよとしていて優し味のある女だと思  
うと、あまりに柔順すぎたりして、またそれが才気を見せれば多  
情でないかと不安になります。そんなことは選定の最初の関門で  
すよ。妻に必要な資格は家庭を預かることですから、文学趣味と  
かおもしろい才気などはなくてもいいようなものですが、まじめ  
一方で、なりふりもかまわないで、ひたいがみ額髪をうるさがって耳の  
後ろへはさんでばかりいる、ただ物質的な世話だけを一所懸命に  
やいてくれる、そんなのではね。お勤めに出れば出る、帰れば帰  
るで、役所のこと、友人や先輩のことなどで話したいことがたく  
さんあるんですから、それは他人には言えません。理解のある妻  
に話さないではつまりません。この話を早く聞かせたい、妻の意

見も聞いて見たい、こんなことを思っているとそとでもひとりえ独

笑みが出来ますし、一人で涙ぐまれもします。また自分のことにな

いことに公憤を起こしまして、自分の心にだけ置いておくことに

我慢のできぬような時、けれども自分の妻はこんなことのわかる

女でないのだと思うと、横を向いて一人で思い出し笑いをしたり、

かわいそうなものだなどとひとりごと独言を言うようになります。そん

な時に何なんですかと突つけんどん慥貪に言つて自分の顔を見る細君な

どはたまらないではありませんか。ただ一概に子供らしくておと

なし妻を持った男はだれでもよく仕込むことに苦心するもので

す。たよりなくは見えても次第に養成されていく妻に多少の満足

を感じるものです。一いっしょ緒にいる時は可憐さが不足を補つて、そ

れでも済むでしようが、家を離れている時に用事を言つてやりましても何ができましよう。遊戯も風流も主婦としてすることも自発的には何もできない、教えられただけの芸を見せるにすぎないような女に、妻としての信賴を持つことはできません。ですからそんなのもまただめです。平生はしつくりといかぬ夫婦仲で、淡い憎しみも持たれる女で、何かの場合によい妻であることが痛感されるのもあります」

こんなふうな通な<sup>つう</sup>左馬頭にも決定的なことは言えないと見えて、深い<sup>ためい</sup>歎息をした。

「ですからもう階級も何も言いません。容貌<sup>きりよう</sup>もどうでもいいとします。片よつた性質でさえなければ、まじめで素直な人を妻に

すべきだと思えます。その上に少し見識でもあれば、満足して少しの欠点はあつてもよいことにするのですね。安心のできる点多ければ、趣味の教育などはあとからできるものですよ。上品ぶつて、恨みを言わなければならぬ時も知らぬ顔で済ませて、表面は賢女らしくしていても、そんな人は苦しくなつてしまうと、凄す文句ごもんくや身にしませる歌などを書いて、思い出してもらえる材料にそれを残して、遠い郊外とか、まったく世間と離れた海岸とかへ行つてしまいます。子供の時に女房などが小説を読んでいるのを聞いて、そんなふうの女主人公に同情したものでしてね、りつぱな態度だと涙までもこぼしたものです。今思うとそんな女のやり方は軽けいちよう佻ちようで、わざとらしい。自分を愛していた男を捨てて

置いて、その際にちよつとした恨めしいことがあつても、男の愛を信じないように家を出たりなどして、無用の心配をかけて、そうして男をためそうとしているうちに取り返しのならぬはめに至ります。いやなことです。りっぱな態度だなどとほめたてられると、凶に乗つてどうかすると尼なんかにもなります。その時はきたない未練は持たずに、すっかり恋愛を清算した気でいますが、まあ悲しい、こんなにまであきらめておしまいになつてなどと、知つた人が訪問して言い、真底から憎くはなつていない男が、それを聞いて泣いたという話などが聞こえてくると、召使や古い女房などが、殿様はあんなにあなたを思つていらつしやいますのに、若いおからだを尼になどしておしまいになつて惜しい。こんなこ

とを言われる時、短くして後ろ梳すきにしてしまった額髪に手が行って、心細い気になると自然に物思ものいをするようになります。忍んでももう涙を一度流せばあとは始終泣くことになります。御弟みで子しになった上でこんなことでは仏様も未練をお憎みになるでしょう。俗であつた時よりもそんな罪は深くて、かえつて地獄へも落ちるように思われます。また夫婦の縁が切れずに、尼にはならず、良人おととに連れもどされて来ても、自分を捨てて家出をした妻であることを良人に忘れてもらうことはむずかしいでしょう。悪くてもよくてもいっしょにいて、どんな時もこんな時も許し合つて暮らすのがほんとうの夫婦でしょう。一度そんなことがあつたあとでは真実の夫婦愛がかえつてこないものです。また男の愛がほ

んとうにきめている場合に家出をしたりすることは愚かですよ。恋はなくなつていても妻であるからと思つていつしよにいてくれた男から、これを機会に離縁を断行されることにもなります。なんでも穏やかに見て、男にほかの恋人ができた時にも、全然知らぬ顔はせずに感情を傷つけない程度の怨みうらみを見せれば、それであつた愛を取り返すことにもなるものです。浮気うわきな習慣は妻次第でなつていくものです。あまりに男に自由を与えすぎる女も、男にとつては気楽で、その細君の心がけがかわいく思われそうでありますが、しかしそれもですね、ほんとうは感心のできかねる妻の態度です。つながれない船は浮き歩くということになるじゃありませんか、ねえ」



中将はうなずいた。

「現在の恋人で、深い愛着を覚えていながらその女の愛に信用が持てないということはよくない。自身の愛さえ深ければ女のあやふやな心持ちも直して見せることができるはずだが、どうだろうか。方法はほかにありませんよ。長い心で見えていくだけですわね」

と頭とうのちゆうじよう 中将は言つて、自分の妹と源氏の中はこれに当たつ

ているはずだと思ふのに、源氏が目を閉じたままでも何も言わぬのを、物足らずも口惜くちおしくも思つた。左馬頭さまのかみは女の品定めしなぢめの審判者であるというような得意な顔をしていた。中将は左馬頭にもつと語らせた心があつてしきりに相槌あいづちを打つているのであつた。

「まあほかのことにして考えてごらんさい。指物師さしものしがいろいろ

ろな製作をしましても、一時的な飾り物で、決まった形式を必要としないものは、しやれた形をこしらえたものなどに、これはおもしろいと思わせられて、いろいろなもの、次から次へ新しい物がいいように思われますが、ほんとうにそれがなければならぬ道具というような物を上手じょうずにこしらえ上げるのは名人でなければできないことです。また絵所えどころに幾人も画家がいますが、席上の絵の描き手かに選ばれておおぜいで出ます時は、どれがよいのか悪いのかちよつとわかりませんが、非写実的な蓬萊山ほうらいさんとか、荒海の大魚とか、唐からにしかない恐ろしい獣の形とかを描く人は、勝手ほうだいに誇張したもので人を驚かせて、それは実際に遠くてもそれで通ります。普通の山の姿とか、水の流れとか、自分た

ちが日常見ている美しい家や何かの図を写生的におもしろく混ぜて描き、われわれの近くにあるあまり高くない山を描き、木をたくさん描き、静寂な趣を出したり、あるいは人の住む邸やしきの中を忠実に描くような時に上手じょうずと下手へたの差がよくわかるものです。字でもそうです。深味がなくて、あちこちの線を長く引いたりするのに技巧を用いたものは、ちよつと見がおもしろいようでも、それと比べてまじめに丁寧に書いた字で見栄みばえのせぬものも、二度目によく比べて見れば技巧だけで書いた字よりもよく見えるものです。ちよつとしたことでもそうなんです、まして人間の問題ですから、技巧でおもしろく思わせるような人には永久の愛が持てないと私は決めています。好色がましい多情な男にお思ひになる

かもしれません。以前のことを少しお話しいたしましょう」

と言つて、左馬頭は膝ひざを進めた。源氏も目をさまして聞いていた。中將は左馬頭の見方を尊重するというふうを見せて、頬杖ほおづえをついて正面から相手を見ていた。坊様が過去未来の道理を説法する席のようで、おかしくないこともないのであるが、この機会に各自の恋の秘密を持ち出されることになった。

「ずっと前で、まだつまらぬ役をしていた時です。私に一人の愛人がございました。容貌ようぼうなどはとても悪い女でしたから、若い浮う気わきな心には、この人とだけで一生を暮らそうとは思わなかつたのです。妻とは思っていましたが物足りなくて外に情人も持つていました。それでとても嫉妬しつとをするものですから、いやで、こんな

ふうでなく穏やかに見ていてくれればよいのにと思いながらも、あまりにやかましく言われますと、自分のような者をどうしてそんなにまで思うのだろうとあわれむような気になる時もあった、自然身持ちが修まっていくようでした。この女というのは、自身にできぬものでも、この人のためにはと努力してかかるのです。

教養の足りなさも自身でつとめて補って、恥のないようにと心がけるたちで、どんなにも行き届いた世話をしてくれまして、私の機嫌きげんをそこねまいとする心から勝ち気もあまり表面に出さなくなり、私だけには柔順な女になって、醜きりようい容貌きりようなんでも私にきらわれまいとして化粧に骨を折りますし、この顔で他人に逢あつては、良人おっとの不名誉になると思つては、遠慮して来客にも近づきません

し、とにかく賢妻にできていましたから、同棲どうせいしているうちに  
利巧りこうさに心が引かれてもいきましたが、ただ一つの嫉妬しつと癖、それ  
だけは彼女自身すらどうすることもできない厄やっかい介なものでした。  
当時私はこう思ったのです。とにかくみじめなほど私に参つてい  
る女なんだから、懲らすような仕打ちに出ておどして嫉妬やきもちやきを改造  
してやろう、もうその嫉妬ぶりに堪えられない、いやでならない  
という態度に出たら、これほど自分を愛している女なら、うまく  
自分の計画は成功するだろうと、そんな気で、ある時にわざと冷  
酷に出まして、例のとおり女がおこり出している時、『こんなあ  
さましいことを言うあなたなら、どんな深い縁で結ばれた夫婦の  
中でも私は別れる決心をする。この関係を破壊してよいのなら、

今のような邪推でも何でももつとするがいい。将来まで夫婦でありたいなら、少々つらいことはあつても忍んで、気にかけないようににして、そして嫉妬のない女になったら、私はまたどんなにあなたを愛するかしれない、人並みに出世してひとかどの官吏になる時分にはあなたがりっぱな私の正夫人でありうるわけだ』などと、うまいものだと自分で思いながら利己的な主張をしたものです。女は少し笑つて、『あなたの貧弱な時代を我慢して、そのうち出世もできるだろうと待っていることは、それは待ち遠しいことであつても、私は苦痛とも思いません。あなたの多情さを辛しく抱んいて、よい良人になつてくださるのを待つことは堪えられないことだと思いますから、そんなことをお言いになることになつ

たのは別れる時になつたわけです』そう口惜くちおしそうに言つてこちらを憤慨させるのです。女も自制のできない性質で、私の手を引き寄せて一本の指にかみついてしまいました。私は『痛い痛い』とたいそうに言つて、『こんな傷までもつけられた私は社会へ出られない。あなたに侮辱された小役人はそんなことではいよいよ人並みに上がつてゆくことはできない。私は坊主にでもなることにするだろう』などとおどして、『じゃあこれがいよいよ別れだ』と言つて、指を痛そうに曲げてその家を出て来たのです。

『手を折りて相見しことを数ふればこれ一つやは君がうきふし



言いぶんはないでしょう』と言うと、さすがに泣き出して、

『うき節を心一つに数へきてこや君が手を別るべきをり』

反抗的に言ったりもしましたが、本心ではわれわれの関係が解消されるものでないことをよく承知しながら、幾日も幾日も手紙一つやらずに私は勝手な生活をしていたので。加茂の臨時祭りの調<sup>ちようがく</sup>樂が御所であつて、更<sup>ふ</sup>けて、それは曇<sup>みぞれ</sup>が降る夜なのです。皆が退散する時に、自分の帰つて行く家庭というものを考えると、その女の所よりないのです。御所の宿直室で寝るのもみじめだし、また恋を風流遊戯にしている局<sup>つぼね</sup>の女房<sup>たず</sup>を訪ねて行くことも寒いこ

とだろうと思われるものですから、どう思っているのだろうと様子も見がてらに雪の中を、少しきまりが悪いのですが、こんな晩に行つてやる志で女の恨みは消えてしまふわけだと思つて、はいつて行くと、暗い灯ひを壁のほうに向けて据すえ、暖かそうな柔らかい、綿のたくさんはいつた着物を大きな炙あぶり籠かごに掛けて、私が寝室へはいる時に上げる几帳きちようのきれも上げて、こんな夜にはきつと来るだろうと待つていたふうが見えます。そう思つていたのだと私は得意になりましたが、妻自身はいません。何人かの女房だけが留守るすをしていまして、父親の家へちようどこの晩移つて行つたというのです。艶えんな歌も詠よんで置かず、気のきいた言葉も残さず、じみにすつと行つてしまつたのですから、つまらない気が

して、やかましく嫉妬をしたのも私にきらわせるためだったのかもしれないなどと、むしやくしやするものですからありうべくもないことまで<sup>そんたく</sup>忖度しましたものです。しかし考えてみると用意してあつた着物なども平生以上によくできていますし、そういう点では実にありがたい親切が見えるのです。自分と別れた後のことまでも世話していったのですからね、彼女がどうして別れうるものかと私は慢心して、それからのち手紙で交渉を始めましたが、私へ帰る気がないでもないようだし、まったく知れない所へ隠れてしまおうともしませんし、あくまで反抗的態度を取ろうともせず、『前のようなふうでは我慢ができない、すっかり生活の態度を変えて、一夫一婦の道を取ろうとお言いになるのなら』と言つ

ているのです。そんなことを言っても負けて来るだろうという自信を持って、しばらく懲らしてやる気で、一婦主義になるとも言わず、話を長引かせていますうちに、非常に精神的に苦しんで死んでしまいましたから、私は自分が責められてなりません。家の妻というものは、あれほどの者でなければならぬと今でもその女が思い出されます。風流ごとにも、まじめな問題にも話し相手にすることができましたし、また家庭の仕事はどんなことにも通じておりました。染め物の立田たつた姫にもなれたし、七たなばた夕たなばたの織姫にもなれたわけです」

と語った左馬頭は、いかにも亡なき妻が恋しそうであった。

「技術上の織姫でなく、永久の夫婦の道を行っている七夕姫だっ

たらよかったですね。立田姫もわれわれには必要な神様だからね。男にまずい服装をさせておく細君はだめですよ。そんな人が早く死ぬんだから、いよいよ良妻は得がたいということになる」

中将は指をかんだ女をほめちぎった。

「その時分にまたもう一人の情人がありましたね、身分もそれは少しいいし、才女らしく歌を詠よんだり、達者に手紙を書いたりしますし、音楽のほうも相当なものだったようです。感じの悪い容き貌りようでもありませんでしたから、やきもち焼きのほうを世話女房にして置いて、そこへはおりおり通って行ったところにはおもしろい相手でしたよ。あの女が亡くなりましたあとでは、いくら今さら愛惜しても死んだものはしかたがなくて、たびたびもう一人の

女の所へ行くようになりますと、なんだか体裁屋で、風流女を標ひ  
ようぼう

榜ようぼう している点が氣に入らなくて、一生の妻にしてもよいとい  
う氣はなくなりました。あまり通わなくなつたところに、もうほか  
に恋愛の相手ができたらしいのですね、十一月ごろのよい月の晩  
に、私が御所から帰ろうとすると、ある殿上役人が来て私の車へ  
いっしよに乗りました。私はその晩は父の大納言だいなごんの家へ行つて  
泊まろうと思つていたので。途中でその人が、『今夜私を待つ  
ている女の家があつて、そこへちよつと寄つて行つてやらないで  
は氣が済みませんから』と言うのです。私の女の家は道筋に当た  
つていのですが、こわれた土塀どべいから池が見えて、庭に月のさし  
ているのを見ると、私も寄つて行つてやつていいという氣になつ

て、その男の降りた所で私も降りたものです。その男のはいつて行くのはすなわち私の行こうとしている家なのです。初めから今日の約束があつたのでしよう。男は夢中のようで、のぼせ上がったふうで、門から近い廊ろうの室の縁側に腰を掛けて、氣どつたふうに見上げていますね。それは実際白菊が紫をぼかした庭へ、風で紅葉もみじがたくさん降ってくるのですから、身にしむように思うのも無理はないのです。男は懐中から笛を出して吹きながら合あい間に『飛鳥井あすかゐに宿りはすべし蔭かげもよし』などと歌うと、中ではいい音のする倭やまと琴ことをきれいに弾ひいて合わせるのです。相当なものなんです。律の調子は女の柔らかに弾くのが御簾みすの中から聞こえるのものはなやかな氣のするものですから、明るい月夜に

はしつくり合っています。男はたいへんおもしろがって、琴を弾いている所の前へ行つて、『紅葉の積もり方を見るとだれもおいでになった様子はありませんね。あなたの恋人はなかなか冷淡なようですね』などといやがらせを言っています。菊を折つて行つて、『琴の音も菊もえならぬ宿ながらつれなき人を引きやとめける。だめですね』などと言ってまた『いい聞き手のおいでになった時にはもつとうんと弾いてお聞かせなさい』こんな嫌味いやみなことを言うと、女は作り声をして『こがらしに吹きあはすめる笛の音を引きとどむべき言の葉ぞなき』などと言ってふざけ合っているのです。私がのぞいていて憎らしがっているのも知らないで、今度は十三絃げんを派手はでに弾き出しました。才女でないことはありません



んがきぎな気がしました。遊戯的の恋愛をしている時は、宮中の女房たちとおもしろおかしく交際していて、それだけでいいのですが、時々にもせよ愛人として通つて行く女がそんなふうではおもしろくないと思ひまして、その晩のことを口実にして別れましたがね。この二人の女を比べて考えますと、若い時でさえもあとの風流女のほうは信頼のできないものだと思つていました。もう相当な年配になつている私は、これからはまたそのころ以上にそうした浮華なものがきらいになるでしょう。いたいたしい萩<sup>はぎ</sup>の露や、落ちそうな笹<sup>ささ</sup>の上の霰<sup>あられ</sup>などにたとえていいような艶<sup>えん</sup>な恋人を持つのがいいように今あなたがたはお思ひになるでしょうが、私の年齢まで、まあ七年もすればよくおわかりになりますよ、私が

申し上げておきますが、風流好みな多情な女には気をおつけなさい。三角関係を発見した時に良人の嫉妬おつとで問題を起こしたりするものです」

左馬頭は二人の貴公子に忠言を呈した。例のように中将はうなづく。少しほほえんだ源氏も左馬頭の言葉に真理がありそうだと思うらしい。あるいは二つともばかばかしい話であると笑っていたのかも知れない。

「私もばか者の話を一つしよう」

中将は前置きをして語り出した。

「私がひそかに情人にした女というのは、見捨てずに置かれる程度のものでね、長い関係になろうとも思わずにかかった人だった

のですが、馴なれていくとよい所ができて心が惹ひかれていった。たまにしか行かないのだけれど、とにかく女も私を信頼するようになった。愛しておれば恨めしさの起こるわけのこちらの態度だかと、自分のことだけれど気のとがめる時があつても、その女は何も言わない。久しく間を置いて逢あつても始終来る人というようにするので、気の毒で、私も将来のことであるんな約束をした。父親もない人だったから、私だけに頼らなければと思つている様子が何かの場合に見えて可憐かれんな女でした。こんなふうに穏やかなものだから、久しく訪たずねて行かなかつた時分に、ひどいことを私の妻の家のほうから、ちようどまたそのほうへも出入りする女の知人を介して言わせたのです。私はあとで聞いたことなんだ。そん

なかわいそうなことがあつたとも知らず、心の中では忘れないでいながら手紙も書かず、長く行きもしないでいると、女はずいぶん心細がつて、私との間に小さな子なんかもあつたもんですから、はんもん煩悶した結果、なでしこ撫子の花を使いを持たせてよこしましたよ」

中将は涙ぐんでいた。

「どんな手紙」

と源氏が聞いた。

「なに、平凡なものですよ。『山がつの垣かきは荒るともをりをりに哀れはかけよ撫子の露』つてね。私はそれで行く気になって、行って見ると、例のとおり穏やかなものなんです、少し物思いのある顔をして、秋の荒れた庭をながめながら、そのころの虫の声

と同じような力のないふうでいるのが、なんだか小説のようでしたよ。『咲きまじる花は何れとわかねどもなほ常夏とこなつにしくものぞなき』子供のことは言わずに、まず母親の機嫌きげんを取ったのですよ。『打ち払そでふ袖も露けき常夏あらしに嵐吹き添ふ秋も来にけり』こんな歌をはかなそうに言つて、正面から私を恨むふうもありません。うっかり涙をこぼしても恥ずかしそうに紛らしてしまふのです。恨めしい理由をみずから追究して考えていくことが苦痛らしかつたから、私は安心して歸つて来て、またしばらく途絶えているうちに消えたようにいなくなつてしまつたのです。まだ生きておれば相当に苦勞をしているでしょう。私も愛していたのだから、もう少し私をしつかり離さずにつかんでいてくれたなら、そうした

みじめな目に逢<sup>あ</sup>いはしなかつたのです。長く途絶えて行かないというようなこともせず、妻の一人として待遇のしようもあつたのです。撫子の花と母親の言つた子もかわいい子でしたから、どうかして捜し出したいと思つていますが、今に手がかりがありません。これはさっきの話のたよらない性質の女にあたるでしょう。素知らぬ顔をしていて、心で恨めしく思つていたのに気もつかず、私のほうではあくまでも愛していたというのも、いわば一種の片恋と言えますね。もうぼつぼつ今は忘れかけていますが、あちらではまだ忘れられずに、今でも時々はつらい悲しい思いをしているだろうと思われます。これなどは男に永久性の愛を求めようとせぬ態度に出るもので、確かに完全な妻にはなれませぬ。だか

らよく考えれば、左馬頭のお話の嫉妬しつと深い女も、思い出としてはいいでしょうが、今いつしよにいる妻であつてはたまらない。どうかすれば断然うわきいやになつてしまふでしょう。琴の上手じょうずな才女というのも浮氣うわきの罪がありますね。私の話した女も、よく本心の見せられない点に欠陥があります。どれがいちばんよいとも言えないことは、人生の何のこともそうですがこれも同じです。何人かの女からよいところを取つて、悪いところの省かれたような、そんな女はどこにもあるものですか。吉祥きちじょうてんによ天女を恋人にしようと思つと、それでは仏法くさくなつて困るということになるだろうからしかたがない」

中將ちゆうしやうがこう言つたので皆笑つた。

「式部の所にはおもしろい話があるだろう、少しずつでも聞きた  
いものだね」

と中将が言い出した。

「私どもは下の下の階級なんですよ。おもしろくお思になるよ  
うなことがどうしてございますものですか」

しきぶのじょう

式部丞は話をことわっていたが、

とうのちゆうじょう  
頭中将が本気にな

って、早く早くと話を責めるので、

「どんな話をいたしましたしてよろしいか考えましたが、こんなこと  
がございます。まだ もんじょうせい 文章生時代のことですが、私はある賢女

おつと

の良人になりました。さつきの さまのかみ 左馬頭のお話のように、役所の

仕事の相談相手にもなりますし、私の処世の方法なんかについて



も役だつことを教えていてくれました。学問などはちよつとした博士などは恥はかせずかしいほどのもので、私なんかは学問のことなどでは、前で口がきけるものじゃありませんでした。それはある博士の家へ弟子でしになつて通つておりました時分に、先生に娘がおおぜいあることを聞いていたものですから、ちよつとした機会をとらえて接近してしまつたのです。親の博士が二人の關係を知るとすぐに杯を持ち出して白楽天の結婚の詩などを歌つてくれましたが、実は私はあまり氣が進みませんでした。ただ先生への遠慮でその關係はつながつておりました。先方では私をたいへんに愛して、よく世話をしまして、夜分やす寝んでいる時にも、私に学問のつくような話をしたり、官吏としての心得方などを言つてくれたり

いたすのです。手紙は皆きれいな字の漢文です。仮名かななんか一字だつて混じつておりません。よい文章などをよこされるものですから別れかねて通つていたのでございます。今でも師匠の恩というようなものをその女に感じますが、そんな細君を持つのは、学問の浅い人間や、まちがいだらけの生活をしている者にはたまらないことだとその当時思つておりました。またお二方のようなえらい貴公子方にはそんなずうずうしい先生細君なんかの必要はございません。私どもにしましても、そんなのとは反対に齒がゆるいような女でも、気に入つておればそれでいいのですし、前生の縁というものもありますから、男から言えばあるがままの女でいいのでございます」

これで式部丞しきぶのじょうが口をつぐもうとしたのを見て、頭中将は今  
の話を続きをさせようとして、

「とてもおもしろい女じゃないか」

と言うと、その気持ちがあわかっていながら式部丞は、自身をば  
かにしたふうで話す。

「そういたしましたして、その女の所へずっと長く参らないでいまし  
た時分に、その近辺に用のございましたついでに、寄って見ます  
と、平生の居間の中へは入れないのです。物越しに席を作つてす  
わらせませす。嫌味いやみを言おうと思つていいのか、ばかばかしい、そ  
んなことでもすれば別れるのにいい機会がとらえられるというも  
のだと私は思っていました。賢女ですもの、軽々しく嫉妬しつとなど

をするものではありません。人情にもよく通じていて恨んだりな  
んかもしやしません。しかも高い声で言うのです。『月来、風げつらい ふう  
うびよう

病 重きに堪えかね極熱ごくねつの草薬を服しました。それで私はく  
さいのでようお目にかかりません。物越しでも何か御用があれ  
ば承りましょう』つてもつともらしいのです。ばかばかしくて返  
辞ができるものですか、私はただ『承知いたしました』と言つて  
帰ろうとしました。でも物足らず思つたのですか『このにおいの  
なくなるころ、お立ち寄りください』とまた大きな声で言います  
から、返辞をしないで来るのは気の毒ですが、ぐずぐずもしてい  
られません。なぜかというひると草薬の蒜ひるなるものの臭気がいっぱい  
なんですから、私は逃げて出る方角を考えながら、『ささがにの

振舞ふるまひしるき夕暮れにひるま過ぐせと言ふがあやなき。何の口実  
なんだか』と言うか言わないうちに走つて来ますと、あとから人  
を追いかけて返歌をくれました。『逢あふことの夜をし隔てぬ  
中ならばひるまも何か眩まぼゆからまし』というのです。歌などは早  
くできる女なんでございます」

式部丞の話はしずしずと終わつた。貴公子たちはあきれて、

「うそだろう」

と爪つまはじ弾きをして見せて、式部をいじめた。

「もう少しよい話をしたまえ」

「これ以上珍しい話があるものですか」

式部丞は退さがつて行つた。

「総体、男でも女でも、生かじりの者はそのわずかな知識を残らず人に見せようとするから困るんですよ。三史五経の学問を始終引き出されてはたまりませんよ。女も人間である以上、社会百般のことについてまったくの無知識なものはないわけです。わざわざ学問はしなくても、少し才のある人なら、耳からでも目からでもいろいろなことは覚えられます。自然男の知識に近い所へまでいつている女はつい漢字をたくさん書くことになって、どうしても書く手紙にも半分以上漢字が混じっているのを見ると、いやなことだ、あの人にこの欠点がなければという気がします。書いた当人はそれほど気で書いたのではなくても、読む時に音が強くて、言葉の舌ざわりがなめらかでなく嫌味いやみになるものです。

これは貴婦人もするまちがった趣味です。歌詠<sup>よ</sup>みだといわれている人が、あまりに歌にとらわれて、むずかしい故事なんかを歌の中へ入れておいて、そんな相手になっっている暇のない時などに詠<sup>よ</sup>みかけてよこされるのはいやになってしまふことです、返歌をせねば礼儀でなし、またようしないでは恥だし困ってしまひますね。宮中の節会<sup>せちえ</sup>の日なんぞ、急いで家を出る時は歌も何もあつたものではありません。そんな時に菖蒲<sup>しょうぶ</sup>に寄せた歌が贈られる、九月の菊の宴に作詩のことを思つて一所懸命になつている時に、菊の歌。こんな思いやりのないことをしなくても場合さえよければ、真価が買つてもらえる歌を、今贈つては目にも留めてくれないということがわからないでよこしたりされると、ついその人が

軽蔑けいべつされるようになります。何にでも時と場合があるのに、それに気がつかないほどの人間は風流ぶらないのが無難ですね。知つてゐることでも知らぬ顔をして、言いたいことがあつても機会を一、二度ははずして、そのあとで言えばよいだろうと思ひますね」

こんなことがまた左馬頭さまのかみによつて言われている間にも、源氏は心の中でただ一人の恋しい方のことを思ひ続けていた。藤壺ふじつぼの宮は足りない点もなく、才氣の見えすぎる方でもないりつぱな貴女きじよであるとうなずきながらも、その人を思うと例のとおりに胸が苦しみでいっぱいになつた。いずれがよいのか決められずに、ついには筋の立たぬものになつて朝まで話し続けた。



やつと今日は天氣が直った。源氏はこんなふうに宮中にばかり  
 いることも左大臣家の人に氣の毒になつてそこへ行つた。一糸の  
 乱れも見えぬというような家であるから、こんなのがまじめとい  
 うことを第一の条件にしていた、昨夜の談話者たちには氣に入る  
 ところだろうと源氏は思いながらも、今も初めどおりに行儀をく  
 ずさぬ、打ち解けぬ夫人であるのを物足らず思つて、中納言の君、  
なかつかさ中務などという若いよい女房たちとじょうだん冗談を言いながら、  
 暑さに部屋着だけになつてゐる源氏を、その人たちは美しいと思  
 い、こうした接触が得られる幸福を覚えていた。大臣も娘のいる  
 ほうへ出かけて来た。部屋着になつてゐるのを知つて、きちょう几帳を  
 隔てた席について話そうとするのを、

「暑いのに」

と源氏が顔をしかめて見せると、女房たちは笑った。

「静かに」

と言つて、脇きょうそく息いきに寄りかかった様子にも品のよさが見えた。

暗くなつてきたころに、

「今夜は中神のお通り路みちになつておりまして、御所からすぐここへ来てお寝やすみになつてはよろしくございません」

という、源氏の家従たちのしらせがあつた。

「そう、いつも中神は避けることになつているのだ。しかし二条の院も同じ方角だから、どこへ行つてよいかわからない。私はもう疲れていて寝てしまいたいのに」

そして源氏は寢室にはいった。

「このままになすつてはよろしくございません」

また家従が言つて来る。紀伊守きいのかみで、家従の一人である男の家のことが上申される。

「中川辺でございませがこのごろ新築いたしまして、水などを庭へ引き込んでございまして、そこならばお涼しかろうと思ひます」  
「それは非常によい。からだが大儀だから、車のままではいれる所にしたい」

と源氏は言つていた。隠れた恋人の家は幾つもあるはずであるが、久しぶりに帰つてきて、方角除よけにはかの女の所へ行つては夫人に済まぬと思つていらしい。呼び出して泊まりに行くこと

を紀伊守に言うと、承知はして行つたが、同輩のいる所へ行つて、  
「父の伊予守——伊予は太守の国で、官名は介すけになつてゐるが事  
実上の長官である——の家のほうにこのごろ障さわりがありまして、  
家族たちが私の家へ移つて来てゐるのです。もとから狭い家なん  
ですから失礼がないかと心配です」と迷惑まごげに言つたことがまた  
源氏の耳にはいると、

「そんなふうにな人がたくさんゐる家がうれしいのだよ、女の人の  
居所が遠いような所は夜がこわいよ。伊予守の家族のゐる部屋の  
几帳きちょうの後ろでいいのだからね」

冗談じょうだん 混じりにまたこう言わせたものである。

「よいお泊まり所になればよろしいが」

と言つて、紀伊守は召使を家へ走らせた。源氏は微行しのびで移りたかつたので、まもなく出かけるのに大臣へも告げず、親しい家従だけをつれて行つた。あまりに急だと言つて紀伊守がこぼすのを他の家従たちは耳に入れないで、寢殿しんでんの東向きの座敷そうじを掃除させて主人へ提供させ、そこに宿泊したくの仕度ができた。庭に通した水の流れなどが地方官級の家としては凝こつてできた住宅である。わざと田舎いなかの家らしい柴垣しばがきが作つてあつたりして、庭の植え込みなどもよくできていた。涼しい風が吹いて、どこでもなく虫が鳴き、蜚ほたるがたくさん飛んでいた。源氏の従者たちは渡殿わたどのの下をくぐつて出て来る水の流れに臨んで酒を飲んでいた。紀伊守が主人をよりよく待遇するために奔走している時、一人でいた源氏は、

家の中をながめて、前夜の人たちが階級を三つに分けたその中の品ちゆうの列にはいる家であろうと思ひ、その話を思ひ出してゐた。思ひ上がった娘だといふ評判の伊予守の娘、すなわち紀伊守の妹であつたから、源氏は初めからそれに興味を持つていて、どの辺の座敷にゐるのであろうと物音に耳を立ててゐると、この座敷の西に続いた部屋で女の衣摺きぬずれが聞こえ、若々しい、媚なまめかしい声で、しかもさすがに声をひそめてものを言つたりしてゐるのに気がついた。わざとらしいが悪い感じもしなかつた。初めその前の縁こうしの格子が上げたままになつてゐたのを、不用意だといつて紀伊守がしかつて、今は皆戸がおろされてしまつたので、その室の灯影ほかげが、襖からかみ子の隙間すきまから赤くこちらへさしてゐた。源氏は静かにそこへ

寄って行って中が見えるかと思つたが、それほどの隙間はない。しばらく立つて聞いていると、それは襖子の向こうの中央の間に集まつてしているらしい低いさざめきは、源氏自身が話題にされているらしい。

「まじめらしく早く奥様をお持ちになつたのですからお寂しいわけですわね。でもずいぶん隠れてお通いになる所があるんですつて」

こんな言葉にも源氏ははつとした。自分の作っているあるまじい恋を人が知つて、こうした場合に何とか言われていたらどうだろうと思つたのである。でも話はただ事ばかりであつたから皆を聞こうとするほどの興味が起こらなかつた。式部卿しきぶきょうの宮の姫君

に朝顔を贈った時の歌などを、だれかが得意そうに語つてもいた。行儀がなくて、会話の中に節をつけて歌を入れたがる人たちだ、中の品がおもしろいといつても自分には我慢のできぬこともあるだろうと源氏は思った。

紀伊守が出て来て、とうろう 灯籠の数をふやさせたり、座敷の灯ひを明るくしたりしてから、主人には遠慮をして菓子だけを献じた。

「わが家とはちよう ばり帳をも掛けたればつて歌ね、大君来ませ婿にせんつてね、そこへ気がつかないでは主人の手落ちかもしれない」  
「通人でない主人でございまして、どうも」

紀伊守は縁側でかしまつていた。源氏は縁に近い寢床で、か 仮り 臥ねのように横になっていた。随行者たちももう寝たようである。



紀伊守は愛らしい子供を幾人も持っていた。御所の侍童を勤めて源氏の知った顔もある。縁側などを往來する中<sup>ゆきぎ</sup>には伊予守の子もあつた。何人かの中に特別に上品な十二、三の子もある。どれが子で、どれが弟かなどと源氏は尋ねていた。

「ただ今通りました子は、亡<sup>な</sup>くなりました衛門<sup>えもん</sup>督<sup>のかみ</sup>の末<sup>むすこ</sup>の息子で、かわいがられていたのですが、小さいうちに父親に別れまして、姉の縁でこうして私の家にいるのでございます。将来のためにもなりますから、御所の侍童を勤めさせたいようですが、それも姉の手だけでははかばかしく運ばないのでございましょう」

と紀伊守が説明した。

「あの子の姉さんが君の継母なんだね」

「そうでございます」

「似つかわしくないお母さんを持ったものだね。その人のことは陛下もお聞きになつていらつしつて、宮仕えに出したいと衛門督が申していたが、その娘はどうなつたのだらうつて、いつかお言葉があつた。人生はだれがどうなるかわからないものだね」

老成者らしい口ぶりである。

「不意にそうなつたのでございます。まあ人というものは昔も今も意外なふうにも変わつてゆくものですが、その中でも女の運命ほどはかないものはございません」

などと紀伊守は言つていた。

「伊予介は大事にするだろう。主君のように思うだろうな」

「さあ。まあ私生活の主君でございますかな。好色すぎると私はじめ兄弟はにがにがしがっております」

「だって君などのような当世男に伊予介は譲ってくれないだろう。あれはなかなか年は寄ってもりっぱな風采ふうさいを持っているのだからね」

などと話しながら、

「その人どちらにいるの」

「皆下屋しもやのほうへやってしまったのですが、間にあいませんで一部分だけは残っているかもしれないと」

と紀伊守は言った。

深く酔った家従たちは皆夏の夜を板敷で仮寝してしまつたので

あるが、源氏は眠れない、一人臥ねをしていると思うと目がさめがちであった。この室の北側の襖からかみ子の向こうに人のいるらしい音のする所は紀伊守の話した女のそつとしている室であろうと源氏は思った。かわいそうな女だとその時から思っていたのであったから、静かに起きて行つて襖子越しに物声を聞き出そうとした。その弟の声で、

「ちよいと、どこにいらつしやるの」

と言う。少し涸かれたきれいな声である。

「私はここで寝やすんでいるの。お客様はお寝みになったの。ここと近くてどんなに困るかと思つていたけれど、まあ安心した」

と、寢床から言う声もよく似ているので姉弟であることがわか

つた。

「<sup>ひさし</sup>廂の室でお寝みになりましたよ。評判のお顔を見ましたよ。ほんとうにお美しい方だった」

一段声を低くして言っている。

「昼だったら私ものぞくのだけけれど」

睡<sup>ね</sup>むそうに言つて、その顔は蒲団<sup>ふとん</sup>の中へ引き入れたらしい。もう少し熱心に聞けばよいのにと源氏は物足りない。

「私は縁の近くのほうへ行つて寝ます。暗いなあ」

子供は燈心を搔<sup>か</sup>き立てたりするものらしかった。女は襖子の所からすぐ斜<sup>すじ</sup>いにあたる辺で寝ているらしい。

「中将はどこへ行つたの。今夜は人がそばにいてくれないと何だ

か心細い気がする」

低い下の室のほうから、女房が、

「あの人ちようどお湯にはいりに参りまして、すぐ参ると申しました」

と言つていた。源氏はその女房たちも皆寝静まつたところに、掛か鉄けがねをはずして引いてみると襖子はさつとあいた。向こう側には掛鉄がなかつたわけである。そのきわに几帳きちょうが立ててあつた。ほのかな灯ひの明りで衣服箱などがごたごたと置かれてあるのが見える。源氏はその中を分けるようにして歩いて行つた。

小さな形で女が一人寝ていた。やましく思いながら顔をおお掩うた着物を源氏が手で引きのけるまで女は、さつき呼んだ女房の中將

が来たのだと思っていた。

「あなたが中将を呼んでいらつしやつたから、私の思いが通じたのだと思つて」

と源氏のさいし宰相しょうのちゆうじょう中将ちゆうじょう将は言いかけたが、女は恐ろしがって、

夢に襲われているようなふうである。「や」と言うつもりがあるが、顔に夜着がさわつて声にはならなかつた。

「出来心のようにあなたは思うでしょう。もつともだけれど、私はそうじゃないのですよ。ずっと前からあなたを思っていたのです。それを聞いていただきたいのでこんな機会を待っていたのです。だからすべて皆ぜん前しょう生しょうの縁が導くのだと思つてください」

柔らかい調子である。神様だつてこの人には寛大であらねばな

らぬだろうと思われる美しきで近づいているのであるから、露骨に、

「知らぬ人がこんな所へ」

ともものしることができない。しかも女は情けなくてならないのである。

「人まちがえでいらつしやるのでしよう」

やっと、息よりも低い声で言った。当惑しきった様子が柔らかい感じであり、可憐かれんでもあつた。

「違うわけがないじゃありませんか。恋する人の直覚であなただと思つて来たのに、あなたは知らぬ顔をなさるのだ。普通の好色者がするような失礼を私はしません。少しだけ私の心を聞いてい



ただけばそれでよいのです」

と言つて、小柄な人であつたから、片手で抱いて以前の襖からかみ子の所へ出て来ると、さつき呼ばれていた中将らしい女房が向こうから来た。

「ちよいと」

と源氏が言つたので、不思議がつて探り寄つて来る時に、薫たき込めた源氏の衣服の香が顔に吹き寄つてきた。中将は、これがだれであるかも、何であるかもわかつた。情けなくて、どうなることかと心配でならないが、何とも異論のはさみようがない。並みの男であつたならでできるだけの力の抵抗もしてみるはずであるが、しかもそれだつて荒だてて多数の人に知らせることは夫人

の不名誉になることであつて、しないほうがよいのかもしれない。こう思つて胸をとどろかせながら従つてきたが、源氏の中將はこの中將をまつたく無視していた。初めの座敷へ抱いて行つて女をおろして、それから襖子をしめて、

「夜明けにお迎えに来るがいい」

と言つた。中將はどう思うであろうと、女はそれを聞いただけでも死ぬほどの苦痛を味わつた。流れるほどの汗になつて悩ましような女に同情は覚えながら、女に対する例の誠実な調子で、女の心が当然動くはずだと思われるほどに言つても、女は人間のおきて掟に許されていない恋に共鳴してこない。

「こんな御無理を承ることが現実のことであろうとは思われませ

ん。卑しい私ですが、けいべつ軽蔑してもよいものだというあなたのお心持ちは私は深くお恨みに思います。私たちの階級とあなた様たちの階級とは、遠く離れて別々のものなのです」

こう言つて、強さで自分を征服しようとしている男を憎いと思う様子は、源氏を十分に反省さす力があつた。

「私はまだ女性に階級のあることも何も知らない。はじめての経験なんです。普通の多情な男のようにお取り扱いになるのを恨めしく思います。あなたの耳にも自然はいつているでしょう、むやみな恋の冒険などを私はしたこともありません。それにもかかわらず前生の因縁は大きな力があつて、私をあなたに近づけて、そしてあなたからこんなにはずかしめられています。ごもつともだ

とあなたになつて考えれば考えられますが、そんなことをするま  
でに私はこの恋に盲目になつています」

まじめになつていろいろと源氏は説くが、女の冷ややかな態度  
は変わつていくけしきもない。女は、一世の美男であればあるほ  
ど、この人の恋人になつて安んじている自分にはなれない、冷血  
的な女だと思われてやむのが望みであると考えて、きわめて弱い  
人が強さをしいてつけているのは弱なよたけ竹のようで、さすがに折る  
ことはできなかつた。真からあさましいことだと思ふううに泣く  
様子などが可憐かれんであつた。氣の毒ではあるがこのままで別れたら  
のちのちまでも後悔が自分を苦しめるであらうと源氏は思ったの  
であつた。

もうどんなに勝手な考え方をしても救われない過失をしてしまったと、女の悲しんでいるのを見て、

「なぜそんなに私が憎くばかり思われるのですか。お嬢さんか何かのようにあなたの悲しむのが恨めしい」

と、源氏が言うと、

「私の運命がまだ私を人妻にしません時、親の家の娘でございました時に、こうしたあなたの熱情で思われましたのなら、それは私の迷いであつても、他日に光明のあるようなことも思つたでございましょうが、もう何もだめでございます。私には恋も何もありません。ですからせめてなかつたことだと思つてしまつてくだ

さい」

と言う。悲しみに沈んでいる女を源氏ももつともだと思った。

真心から慰めの言葉を発しているのであった。

鶏とりの声がしてきた。家従たちも起きて、

「寝坊をしたものだ。早くお車の用意をせい」

そんな命令も下していた。

「女の家へ方かたが違えにおいでになった場合とは違いますよ。早く

お帰りになる必要は少しもないじゃありませんか」

と言っているのは紀伊守であった。

源氏はもうまたこんな機会が作り出せそうでないことと、今後どうして文通をすればよいか、どうもそれが不可能らしいことで胸を痛くしていた。女を行かせようとしてもまた引き留める源氏

であつた。

「どうしてあなたと通信をしたらいいでしょう。あくまで冷淡なあなたへの恨みも、恋も、一通りでない私が、今夜のことだけをいつまでも泣いて思つていなければならぬのですか」

泣いている源氏が非常に艶えんに見えた。何度も鶏とりが鳴いた。

つれなさを恨みもはてぬしののめにとりあへぬまで驚かすら  
ん

あわただしい心持ちで源氏はこうささやいた。女は己おのれを省みると、不似合いという晴がましさを感じずにいられない源氏からど

んなに熱情的に思われても、これをうれしいこととすることができないのである。それに自分としては愛情の持てない良人おととのいる伊予の国が思われて、こんな夢を見てはいないだろうかと考える  
と恐ろしかった。

身の憂うさを歎なげくにあかで明くる夜はとり重ねても音ねぞ泣かれ  
ける

と言った。ずんずん明るくなってゆく。女は襖からかみ子の所へまで送って行った。奥のほうの人も、こちらの縁のほうの人も起き出して来たんでざわついた。襖子をしめてもとの席へ帰って行く源



氏は、一重の襖子が越えがたい隔ての関のように思われた。

直衣のうしなどを着て、姿を整えた源氏が縁側の高欄こうらんによりかかっているのが、隣室の縁低い衝立ついたての上のほうから見えるのをのぞいて、源氏の美の放つ光が身の中へしみ通るように思っている女房もあつた。残月のあるころで落ち着いた空の明かりが物をさわやかに照らしていた。変わったおもしろい夏の曙あけぼのである。だれも知らぬ物思いを、心に抱いた源氏であるから、主観的にひどく身にしむ夜明けの風景だと思つた。言ことづて一つする便宜がないではないかと思つて顧みがちに去つた。

家へ帰つてからも源氏はすぐに眠ることができなかつた。再会の至難である悲しみだけを自分はしているが、自由な男でない人

妻のあの人はこのほかにいろいろな煩悶はんもんがあるはずであると思いやつていた。すぐれた女ではないが、感じのよさを十分に備えた中の品だ。だから多くの経験を持った男の言うことには敬服される点があると、品定め夜の話を思い出していた。

このごろはずつと左大臣家に源氏はいた。あれきり何とも言つてやらないことは、女の身にとってどんなに苦しいことだろうと中川の女のことがあわれまれて、始終心にかかつて苦しいはてに源氏は紀伊守を招いた。

「自分の手もとへ、この間見た中納言の子供をよこしてくれないか。かわいい子だったからそばで使おうと思う。御所へ出すことも私からしてやろう」

と言うのであった。

「結構なことでございます。あの子の姉に相談してみましよう」

その人が思わず引き合いに出されたことだけでも源氏の胸は鳴った。

「その姉さんは君の弟を生んでいるの」

「それでもございません。この二年ほど前から父の妻になつていますが、死んだ父親が望んでいたことでないような結婚をしたと思ふのでしよう。不満らしいということでございます」

「かわいそうだね、評判の娘だったが、ほんとうに美しいのか」

「さあ、悪くもないのでございましょう。年のむすこいった息子と若い

継母は親しくせぬものだと申しますから、私はその習慣に従つて

おりまして何も詳しいことは存じません」

と紀伊守きいのかみは答えていた。

紀伊守は五、六日してからその子供をつれて来た。整った顔と  
いうのではないが、艶えんな風采ふうさいを備えていて、貴族の子らしいと  
ころがあつた。そばへ呼んで源氏は打ち解けて話してやった。子  
供心に美しい源氏の君の恩顧を受けうる人になれたことを喜んで  
いた。姉のことも詳しく源氏は聞いた。返辞のできることだけは  
返辞をして、つつしみ深くしている子供に、源氏は秘密を打ちあ  
けにくかつた。けれども上じょう手ずに嘘うそまじりに話して聞かせると、  
そんなことがあつたのかと、子供心におぼろげにわかればわかる  
ほど意外であつたが、子供は深い穿せん鑿さくをしようともしない。

源氏の手紙を弟が持つて来た。女はあきれて涙さえもこぼれてきた。弟がどんな想像をするだろうと苦しんだが、さすがに手紙は読むつもりらしくて、きまりの悪いのを隠すように顔の上でひろげた。さつきからからだは横にしていたのである。手紙は長かった。終わりに、

見し夢を逢<sup>あ</sup>ふ夜ありやと歎<sup>なげ</sup>く間に目さへあはでぞ頃<sup>ころ</sup>も経にける

安眠のできる夜がないのですから、夢が見られないわけです。とあった。目もくらむほどの美しい字で書かれてある。涙で目

が曇つて、しまいには何も読めなくなつて、苦しい思いの新しく加えられた運命を思い続けた。

翌日源氏の所から小君がこぎみ召された。出かける時に小君は姉に返事をくれと言つた。

「ああしたお手紙をいただくはずの人がありませんと申し上げればいい」

と姉が言つた。

「まちがわないうように言つていらつしつたのにそんなお返辞はで  
きない」

そう言うのから推おせば秘密はすっかり弟に打ち明けられたものらしい、こう思うと女は源氏が恨めしくてならない。

「そんなことを言うものじゃない。大人の言うようなことを子供が言つてはいけない。お断わりができればお邸やしきへ行かなければいい」

無理なことを言われて、弟は、

「呼びにおよこしになったのですもの、伺わないでは」

と言つて、そのまま行つた。好色な紀伊守はこの継母が父の妻であることを惜しがつて、取り入りたい心から小君にも優しくしてつれて歩きもするのだった。小君が来たというので源氏は居間へ呼んだ。

「昨日きのうも一日おまえを待つていたのに出て来なかつたね。私だけがおまえを愛していても、おまえは私に冷淡なんだね」

恨みを言われて、小君は顔を赤くしていた。

「返事はどこ」

小君はありのままに告げるほかに術すべはなかった。

「おまえは姉さんに無力なんだね、返事をくれないなんて」

そう言ったあとで、また源氏から新しい手紙が小君に渡された。

「おまえは知らないだろうね、伊予の老人よりも私はさきに姉さんの恋人だったのだ。頸くびの細い貧弱な男だからといって、姉さんはあの不恰好ぶかつこうな老人を良人おとこに持つて、今だつて知らないなどと言つて私を軽蔑けいべつしているのだ。けれどもおまえは私の子になつておれ。姉さんがたよりにしている人はさきが短いよ」

と源氏がでたらめを言うと、小君はそんなこともあつたのか、



済まないことをする姉さんだと思ふ様子をかわいく源氏は思つた。小君は始終源氏のそばに置かれて、御所へもいつしよに連れられて行つたりした。源氏は自家の衣裳いしやうがかり係に命じて、小君の衣服を新調させたりして、言葉どおり親代わりらしく世話をしていた。女は始終源氏から手紙をもらった。けれども弟は子供であつて、不用意に自分の書いた手紙を落とすようなことをしたら、もとから不運な自分がまた正しくもない恋の名を取つて泣かねばならぬことになるのはあまりに自分がみじめであるという考えが根底になつていて、恋を得るといふことも、こちらにその人の対象になれる自信のある場合にだけあることで、自分などは光源氏の相手になれる者ではないと思ふ心から返事をしないのであつた。ほ

のかに見た美しい源氏を思い出さないわけではなかったのである。真実の感情を源氏に知らせてもさして何にもなるものでないと、苦しい反省をみずから強いている女であった。源氏はしばらくの間もその人が忘れなかつた。気の毒にも思い恋しくも思った。女が自分とした過失に苦しんでいる様子が目から消えない。本能のおもむくままに忍んであいに行くことも、人目の多い家であるからそのことが知れては困ることになる、自分のためにも、女のためにもと思つては煩悶はんもんをしていた。

例のようにまたずっと御所にいた頃、源氏は方角の障りさわになる日を選んで、御所から来る途中でにわかにな気がついたふうをして紀伊守の家へ来た。紀伊守は驚きながら、

「前裁せんざいの水の名譽でございます」

こんな挨拶あいさつをしていた。小君こぎみの所へは昼のうちからこんな手はずにすると源氏は言つてやつてあつて、約束ができていたのである。

始終そばへ置いている小君であつたから、源氏はさつそく呼び出した。女のほうへも手紙は行つていた。自身に逢おうとして払われる苦心は女の身にうれしいことではあつたが、そうかといつて、源氏の言うままになつて、自己が何であるかを知らないように恋人として逢う気にはならないのである。夢であつたと思うこともできる過失を、また繰り返すことになつてはならぬとも思つた。妄想もうそうで源氏の恋人気どりになつて待つてゐることは自分に

できないと女は決めて、小君が源氏の座敷のほうへ出て行くところ、

「あまりお客様の座敷に近いから失礼な気がする。私は少しからだが苦しくて、腰でもたたいてほしいのだから、遠い所のほうが都合がよい」

と言つて、渡わた殿どのに持っている中将という女房の部屋へやへ移つて行つた。初めから計画的に來た源氏であるから、家従たちを早く寝させて、女へ都合を聞かせに小君をやつた。小君に姉の居所がわからなかつた。やつと渡殿の部屋を捜しあてて來て、源氏への冷酷な姉の態度を恨んだ。

「こんなことをして、姉さん。どんなに私が無力な子供だと思わ

れるでしょう」

もう泣き出しそうになっている。

「なぜおまえは子供のくせによくない役なんかするの、子供がそんなことを頼まれてするのはとてもいけないことなのだよ」

としかって、

「気分が悪くて、女房たちをそばへ呼んで介抱かいぼうをしてもらっていますって申せばいいだろう。皆が怪しがりますよ、こんな所へまで来てそんなことを言っていて」

取りつくしまもないように姉は言うのであったが、心の中では、こんなふうには運命が決まらないころ、父が生きていたころの自分の家へ、たまさかでも源氏を迎えることができたなら自分は幸福だ

つたであろう。しいて作るこの冷淡さを、源氏はどんなにわが身知らずの女だとお思いになることだろうと思つて、自身の意志でしていることであるが胸が痛いようにさすがに思われた。どうしてもこうしても人妻という束縛は解かれないのであるから、どこまでも冷やややかな態度を押し通して変えまいという氣に女はなつていた。

源氏はどんなふうに計らつてくるだろうと、頼みにする者が少年であることを氣がかりに思いながら寝ているところへ、だめであるという報せしらせを小君が持つて来た。女のあさましいほどの冷淡さを知つて源氏は言つた。

「私はもう自分が恥ずかしくつてならなくなつた」

気の毒なふうであつた。それきりしばらくは何も言わない。そして苦しそうに吐息といきをしてからまた女を恨んだ。

ははきぎ  
帚木の心を知らでその原の道にあやなくまどひぬるかな

今夜のこの心持ちはどう言つていいかわからない、と小君に言つてやった。女もさすがに眠れないで悶もだえていたのである。それで、

数ならぬ伏屋ふせやにおふる身のうさにあるにもあらず消ゆる帚木

という歌を弟に言させた。小君は源氏に同情して、眠がらずに往つたり来たりしているのを、女は人が怪しまないかと気にしていた。

いつものように酔つた従者たちはよく眠っていたが、源氏一人はあさましくて寝入れない。普通の女と変わった意志の強さのますます明確になつてくる相手が恨めしくて、もうどうでもよいとちよつとの間は思うがすぐにまた恋しさがかえってくる。

「どうだろう、隠れている場所へ私をつれて行ってくれないか」「なかなか開きあきそうにもなく戸じまりがされていきますし、女房もたくさんおります。そんな所へ、もつたいないことだと思ひます」と小君が言った。源氏が氣の毒でたまらないと小君は思つてい



た。

「じゃあもういい。おまえだけでも私を愛してくれ」

と言って、源氏は小君をそばに寝させた。若い美しい源氏の君の横に寝ていることが子供心に非常にうれしいので、この少年のほうが無情な恋人よりもかわいいと源氏は思った。



# 青空文庫情報

底本：「全訳源氏物語 上巻」角川文庫、角川書店

1971（昭和46）年8月10日改版初版発行

1994（平成6）年12月20日56版発行

※このファイルは、古典総合研究所 (<http://www.genji.co.jp/>) で入力されたものを、青空文庫形式にあらためて作成しました。

※校正には、2002（平成14）年4月5日71版を使用しました。

入力：上田英代

校正：鈴木厚司、小林繁雄

2003年4月17日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 源氏物語

帚木

2020年 7月13日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

著者 紫式部

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>